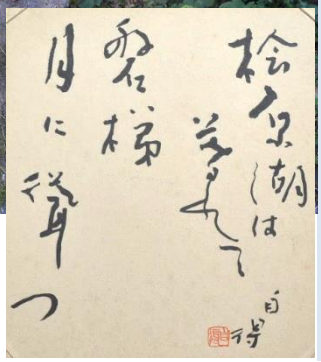
風流な僧・俳人・画家（群馬県前橋市）

松野自得と裏磐梯



「磐梯比翼句碑」　主催　さいかち摺上支部なでしこ句会建立

松野自得

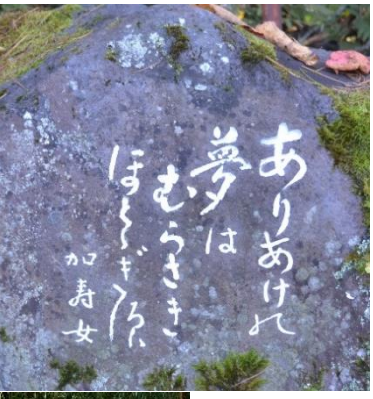
桧原湖は　暮れて磐梯　月に聳（そびえ）つ

松野加寿女

ありあけの　夢はむらさき　ほととぎす

「詠み」　昭和三十八年十一月十日。尾瀬林業観光（株）の「白樺の家」（近くにあった）に宿泊し霊感を感じて読む。

「石碑建立」　昭和三十九年十月　同人の大橋よし子会長や尾瀬林業の鹿沼光治社長の努力で建立。尾瀬林業観光（株）・県観光課後援。石屋は十二日かけ福島の松本緑郎が弟子四人で彫る。文字は最善寺で自得が書く。



中瀬沼遊歩道にある「磐梯比翼」の碑。色紙は最善寺のあるもの。左は加寿女の句です。

最善寺の自得墓。自得の養子松野洋子さんと石田。句碑には「御仏は大地におわす　八重桜」とあり。

松野自得（じとく）

松野自得は、明治二十三年（一八九〇）二月十七日、群馬県館林に生まれ貞安という。四歳の時、母たけが群馬県前橋市大室町の曹洞宗最善寺の城井一秀と再婚。貞安だけは松野姓を名乗ります。明治三十二年中学卒業後、埼玉県入間郡越生町黒山の全洞院に入ります。

絵が好きだったことで日本画を志し、明治四十年四月、上野美術学校に入り浮世絵を学びますが、山内（やまのうち）多門、小室翠雲に師事したことで山水画に転向。このころ自得と改名します。大正五年寺の書生を打切り、埼玉県比企郡ときがわ町玉川の龍蔵寺の住職となります。大正六年、中村不折について中国の六朝（りくちょう）楷書を研究します。龍蔵寺で村人と俳句をしたのがきっかけでホトトギス創刊二十周年号に投函し掲載、高浜虚子の門下生となります。大正九年、第一回院展に入選し上京し絵で生計を立てようとします。大正十四年、自得は若松に来て、シャボン玉吟社を設立しました。昭和三年六月俳句誌「さいかち」が創刊され、薄井二秋の勧めで雑詠選者となります。昭和八年四月、第十二回日本南画院展に出品し院友となります。昭和十二年には台湾一周旅行、十九年には満州俳句旅行をします。昭和二十年、全洞院へ疎開し終戦後の二十年十二月三十日最善寺十九世住職となります。昭和三十六年群馬県文化賞、四十三年群馬県俳句作家協会初代会長、四十七年勲五等瑞宝章。昭和五十年（一九七五）七月七日、静岡県伊東市において八十六歳で亡くなります。

松野加寿女（かずじょ）本名は加寿（かず）

明治三十五年（一九〇二）四月一日東京生まれ。旧姓五代。大正十二年日本女子大学国文学科卒。昭和二年に自得と結婚。自得没後は「さいかち」を主宰します。昭和五十七年（一九八二）三月三日に亡くなります。「さいかち」は、平成九年に「天宵」（てんきゅう）に変化し、天宵俳句会（東京都渋谷区）が後継団体となっています。

図・写真・文　©石田明夫2016
問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「会津歴史観光ガイド協会」で検索。